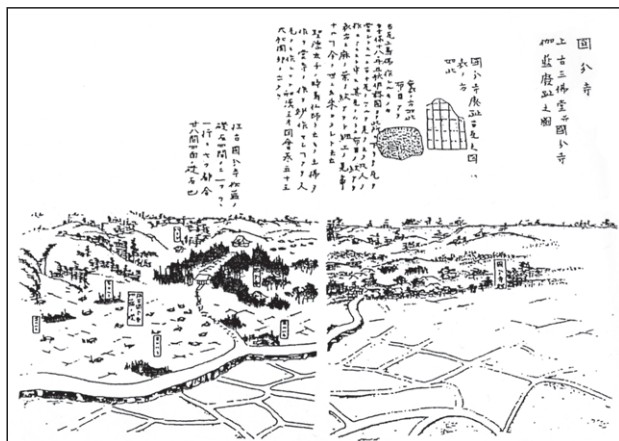


江戸から大正の武蔵国分寺跡

江戸時代から有名だった武蔵国分寺

武蔵国分寺跡は、すでに江戸時代から古瓦や大きな礎石の残る旧跡として注目され、文人・史家・好事家などが訪れていました。文政3年(1820)に、八王子千人同心の植田孟縉によって刊行された『武蔵名勝図会』や、天保元年(1830)に幕府へ上呈された『新編武蔵風土記稿』には、国分寺の様子が紹介されています。

その後も天保5年(1834)には、斎藤月岑が『江戸名所図会』を刊行し、「国分寺伽藍旧跡」、「郡名瓦」を紹介するなど、武蔵国分寺跡は江戸時代の地誌への関心の高まりとともに江戸近郊の名所として知られるようになり、大田南畝や水野越前守忠邦などの著名人をはじめ、多くの人々が訪れるようになりました。



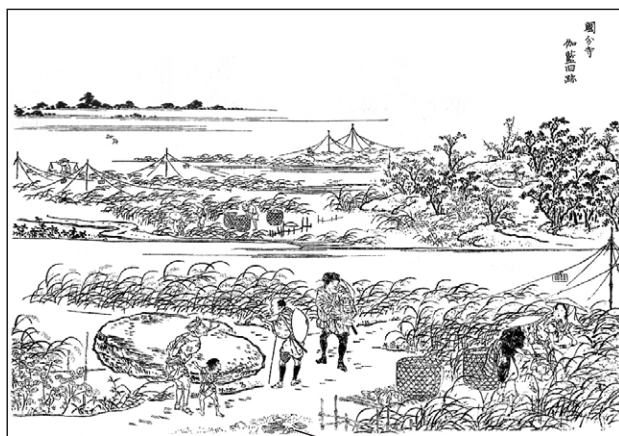
『武蔵名勝図会』(国立公文書館所蔵) 国分寺〔部分〕

現在も史跡に残る武蔵国分寺の礎石は「往古国分寺伽藍ノ礎」として描かれています。



『新編武蔵風土記稿』(国立公文書館所蔵) 国分寺境内図〔部分〕

徳川幕府が編さんした地誌。風土・風俗・産物・伝説などが詳細に記され、当時の武蔵国を知ることのできる重要なもの。



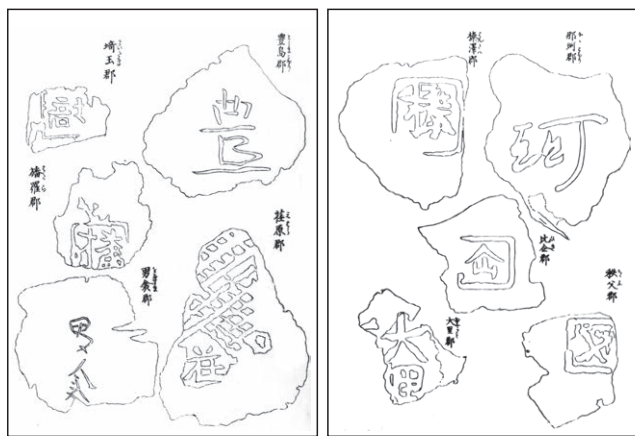
『江戸名所図会』(国立公文書館所蔵)

国分寺伽藍旧跡〔部分〕

左下に描かれた大きな石は礎石。子どもの足元には、古瓦片が散在しています。



古瓦片



『江戸名所図会』(国立公文書館所蔵) 郡名瓦〔部分〕

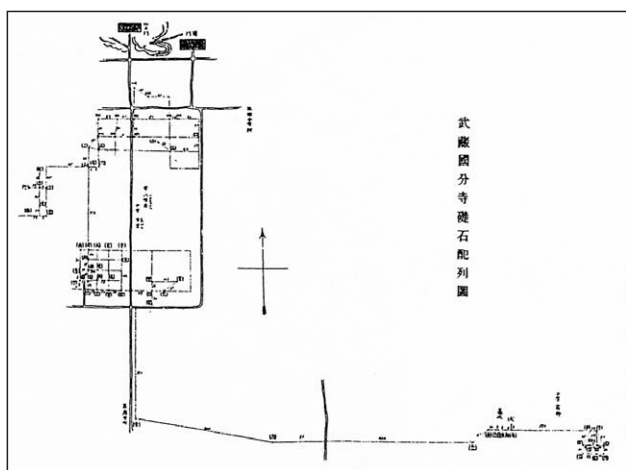
郡名瓦のスケッチ。ヘラ書きの字体や郡名の押印が細かく表現されています。武蔵国分寺跡からは武蔵国の21郡のうち、新羅(新座)郡を除く20の郡名瓦が見つかっています。

科学的調査のはじまり

江戸時代以来、国分寺に対する関心は主に瓦の採集を目的としたものでした。国分寺の広さや建物の大きさなどはあまり注目されず、遺跡そのものの調査は明治になってから行われました。明治36年、東京帝室博物館の歴史課長（当時）の重田定一、考古学者の柴田常恵による科学的な実地調査が行われ、国分寺跡の礎石の配列が調べられました。この調査の結果は、史跡を保存顕彰するために政府の斡旋によって発足した帝國古蹟取調会の『古蹟』という機関誌に掲載されます。

大正に入ると、武蔵国分寺跡に関する論文も書かれるようになり、大正7年の『考古学雑誌』に住田正一が執筆した「武蔵府中古瓦考」では、国分寺の場所を推定した内容も見られます。住田は、同誌に「武蔵国分寺古瓦に就て」（大正4年）、「武蔵国分寺文字瓦に就て」（大正6年）も発表しています。そして大正11年、内務省による各地の国分寺跡の史跡指定が行われ、武蔵国分寺は史跡として指定されます。その時の基礎資料となったのが、重田と柴田による調査の記録でした。

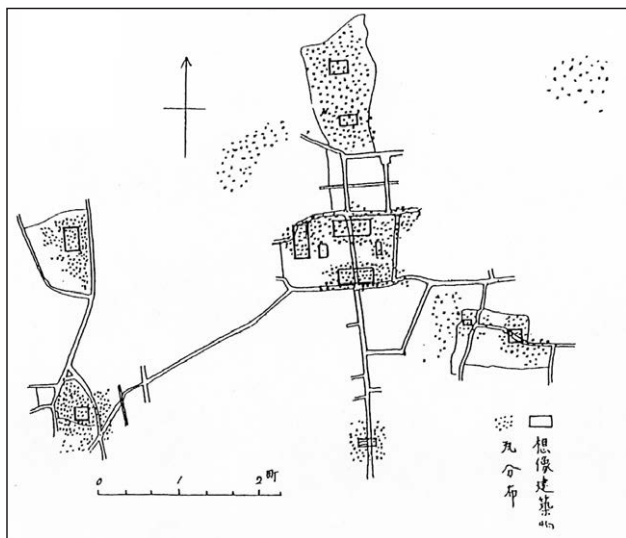
指定を受けたのは、東京府（現：東京都）の主導によって稲村坦元・後藤守一による寺跡全体の調査が行われています。この調査では、瓦の分布状況や礎石の配石配置が調べられ、金堂・講堂に加え、僧坊の場所が推定されています。この成果は大正12年に発行された『東京府史蹟勝地調査報告書』に収められています。



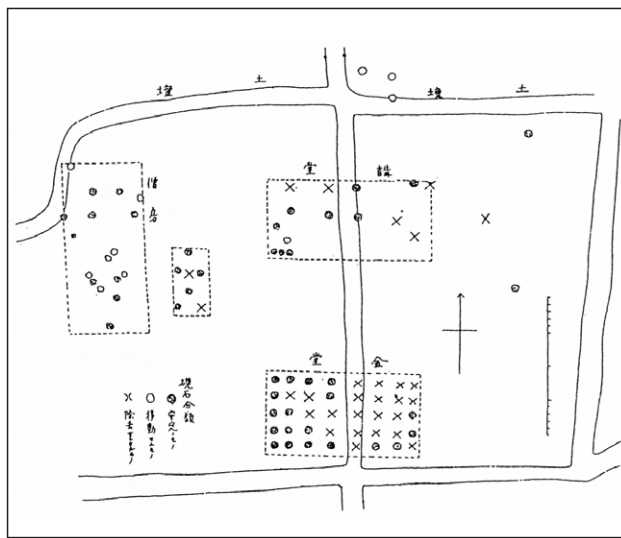
『古蹟』武蔵国分寺礎石配列図〔部分〕



大正11年頃の武蔵国分寺跡の様子



『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊 武蔵国分寺址の調査
瓦の分布状況と国分寺の建物配置が記録されています。



『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊 武蔵国分寺址の調査
礎石配列から建物（金堂・講堂・僧坊）が想定されています。